

うえ はる
上の原第2・第3遺跡

県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書



1995.3

宮崎県教育委員会

表紙写真 上の原第2遺跡全景

序

本書は、宮崎市と清武町にまたがる時屋地区で進められている県営農地保全整備事業に伴い、本年度事業地内で実施した上の原第2遺跡・第3遺跡の発掘調査概要報告書です。

調査の結果、縄文時代早期の集石遺構や縄文時代後期・古墳時代の竪穴住居跡、中世末から近世にかけての屋敷地跡など、当地の歴史を語る上で重要な資料を得ることができました。

それらの概要をまとめた本書が、学術資料として、あるいは学校教育、社会教育の資料として広く活用され、先人の残した文化遺産である埋蔵文化財の保護への理解につながれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大な御協力をいただきました、時屋土地改良区をはじめとする地元の皆様に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

宮崎県教育委員会

教育長 田原直廣

凡 例

1. 本書は、県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う、上の原第2遺跡・第3遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 調査組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教 育 長	田原 直廣
文 化 課 長	江崎 富治
課 長 補 佐	田中 雅文
庶 務 係 長	高山 恵元
埋 蔵 文 化 財	
第 二 係 長	面高 哲郎
同 上 主 事	吉本 正典（調査担当）
同 上 主 事	東 憲章（調査担当）
調 査 員（嘱 託）	鎌田 次郎

3. 本書で使用した上空からの写真の撮影は、株式会社スカイサーベイに委託した。
4. 本書の編集・執筆は吉本が行った。

目 次

第Ⅰ章	はじめに	1
第Ⅱ章	調査の概要	1
1.	遺跡の位置と環境	1
2.	上の原第2遺跡の調査	3
3.	上の原第3遺跡の調査	10
第Ⅲ章	まとめにかえて	12

第Ⅰ章 はじめに

時屋地区の県営農地保全整備事業は平成元年度から8年度まで約60haの面積を対象に行うもので、これに伴い、平成3年度から宮崎市教育委員会により宮崎市側の3遺跡（推屋形第1遺跡・推屋形第2遺跡・上の原遺跡）の記録保存のための発掘調査が実施されている。今回上の原第2遺跡・第3遺跡は、行政区が宮崎市と清武町の2市町にまたがるため平成4年度から宮崎県教育委員会と両市町教育委員会で調査についての協議を重ねてきた。その結果、県が調査主体となり実施することとなり、平成6年4月22日から同年11月25日までの間、発掘調査を行った。なおⅡ期分の発掘調査は平成7年2月14日より同年3月いっぱいの子で実施中である。

第Ⅱ章 調査の概要

1. 遺跡の位置と環境

上の原第2・第3遺跡は、宮崎市街地の南西部の台地（いわゆるシラス台地）上に立地している。遺跡地の標高は約90mを測る。宮崎市大字細江字時雨柳迫と清武町大字船引字上の原にまたがる地域で北緯31°52'70"、東経131°21'60"付近にあたる。

近辺では、前述の宮崎市教育委員会主体による発掘調査によって種々の重要な考古資料の存在が知ら

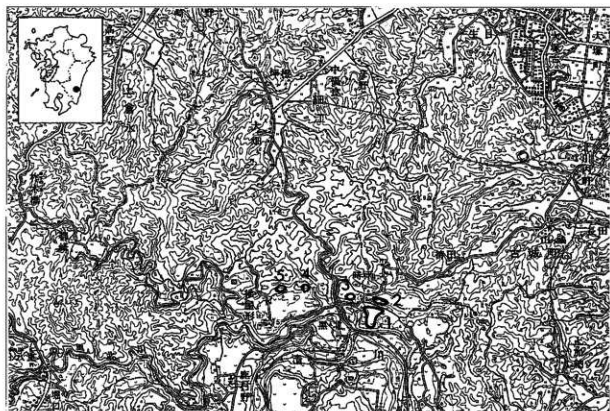


図1 遺跡の位置（1/50000地形図「宮崎」より）

- | | |
|-----------|-----------|
| 1 上の原第2遺跡 | 2 上の原第3遺跡 |
| 3 上の原遺跡 | 4 推屋形第1遺跡 |
| 5 推屋形第2遺跡 | |

0 2km



写真1 第2遺跡調査区(西半)



写真2 第2遺跡調査区(東半)

れるようになった。中でも弥生時代後期の竪穴住居跡や縄文時代草創期の隆帯文土器・爪形文土器を出土した椎屋形第1遺跡や、縄文時代早期の炉穴が多数検出された椎屋形第2遺跡などが特筆されるべきもので、それらの資料は現在整理を進めている段階である。

2. 上の原第2遺跡の調査

調査に際して、耕作土（後述するI a層）を機械力を使用して除去し、N-23°-Eの方向に基線を定め、第2遺跡、第3遺跡共通の10mグリッドを組んでいった。実掘面積は45,500m²である。

基本層序は写真3に見られる通りで、第3遺跡もほぼ同様の状況である。第2遺跡では調査区の中央部ほど下の層まで欠落（おそらく流失）しており、鬼界カルデラ起源の火山灰層で、当地域における重要な鍵層であるⅢ層（アカホヤ層）は周辺部にのみ残存している。

以下、時代順に、検出した主な遺構と出土遺物について触れていく。

縄文時代早期

遺跡の周辺部の主にⅣ層下部～Ⅴ層中より集石遺構が45基と、礫群（ここでは集石よりも礫の分布がより疎らで、広範囲にわたるところを指す）が1か所検出された。伴出する土器は貝殻文円筒土器に属するもので、石鏃、石斧などの石器も若干出土している。尚、遺跡の中心部で該期の遺構・遺物が認められないのは、あるいは文化層自体の流失に起因することかもしれない。



写真3 層序

（写真に示されていないが、近世の遺物を包含するI b層、縄文時代後期の遺物を包含するI c層が、遺跡中央部に見られる）

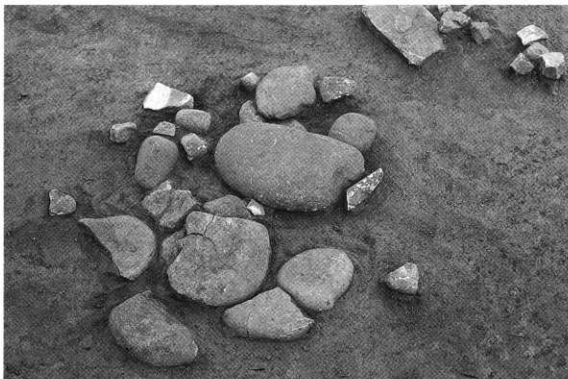


写真4 7号集石(北西より)



写真5 43号集石(北より)

縄文時代後期

円形・隅丸方形の竪穴住居跡が48基、土坑が65基検出された。竪穴住居は中央部にさらに一段低い土坑を持つものが多い。中央の土坑の規模はまちまちである。また、屈縁部に屋内土坑を有する例も多く見られた。柱穴はほとんどの場合不明瞭で、かなど火処の痕跡もあまり認められなかった。土坑の中では、覆土中に焼土が堆積しているものが1基（SC57）あり、注目される。

土器は遺構の覆土中や、遺物包含層のIc層、さらには後の時代の遺構の覆土の中から大量に出土している。多くは在地系の土器（指宿式・市来式など）である。石器では磨石・石皿などのいわゆる植物調理用石器の多さが注目される。

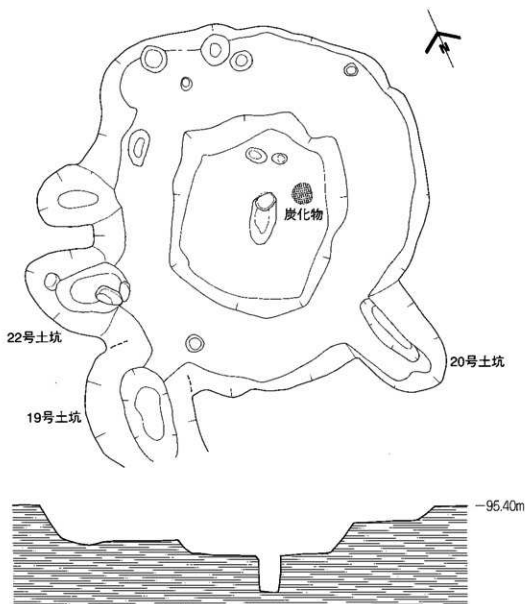


図2 5号竪穴住居跡実測図(1/50)



写真6 8号~12・14号住居跡(北より)



写真7 16号・17号住居跡(西より)



写真8 25号・31号住居跡（北東より）

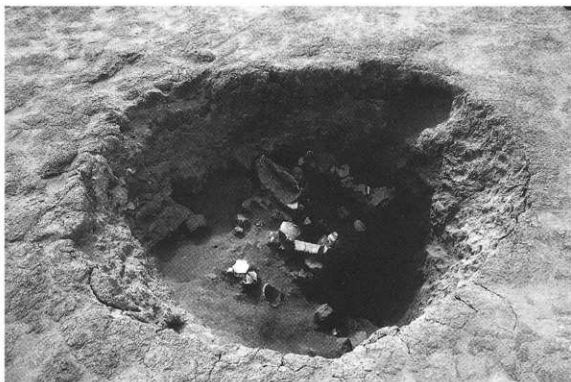


写真9 57号土坑（北より）

中世末～近世

検出した遺構は掘立柱の建物跡6棟、溝6本、集落内道路跡2本、墓塚約40基、石塔（墓標か）や礎の集積箇所1か所、集石6基、石組み土坑1基、土坑135基など。遺物は、各種陶磁器類、鉄製品、石臼などの日常品が遺構内やI b層・I c層に見られた他、板碑、五輪塔の火輪・水輪や墓塚内からの副葬品（寛永通寶）といった、墓地関連資料が出土している。



写真10 1号近世集塚



写真11 柱穴群(1) (西より)



写真12 柱穴群(2) (北より)



写真13 柱穴群(3) (東より)

3. 上の原第3遺跡の調査

調査対象面積である15,500m²の範囲についてⅢ層上面で遺構精査を行い、Ⅳ層下部～Ⅴ層に存在する縄文時代早期の文化層については、期間的な制約があったため遺憾ながら部分的な調査にとどまった。

縄文時代早期

礫群が2か所、集石遺構が9基検出されている。出土土器は第2遺跡同様、貝殻文円筒形土器が主体を占める。

古墳時代

竪穴住居跡が10基検出された。うち2基は切り合っている。4本柱のものが主体で、多くは貼床を施す。在地化した小型精製壺が見られることや、やや中ふくらみになる高坏の脚部、古式の須恵器などの出土土器の特徴から、古墳時代中期の所産と考えている。



写真14 第3遺跡調査区全景



写真15 1号～3号住居跡（東より）



写真16 7号・8号住居跡（南東より）

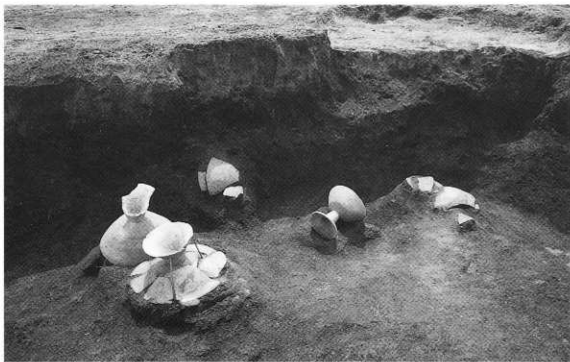


写真17 2号住居跡遺物出土状況

第Ⅲ章 まとめにかえて

今回の概要報告は、確認できた遺構・遺物の紹介を主目的としており、それらの検出・出土位置や状況の報告、あるいは意義付け等については今後の詳細な検討を基に、本報告において行うこととし、ここでは各時代に関する簡略なコメントを添えることにとどめる。

縄文時代の遺構のうち後期の竪穴住居跡は総数48基と、これまでの九州東南部の発掘調査例の中では最多の検出数を数える。それらについては、特異ともいえる竪穴住居跡の形態の意味するところの解明とともに、出土した多量の土器の分析（特に既存の土器編年との照合）を行うことによって、土坑も含めた分布状況の変遷の把握が重要な課題となるであろう。

古墳時代に関しては、竪穴住居跡10基からなる集落の確認できたが、これは、宮崎市・浄土江遺跡などに代表される沖積地の集落とは異なる、台地上の集落の例として、また出土土器はこれまで多いとはいえなかった該期の一括資料として、重要である。

中世末～近世の遺構群は、農山村落の屋敷地のほぼ全容に近いものと言えよう。掘立柱建物は、東西棟のもの6棟ほどを現地を確認できたが、周囲の柱穴の数からは、さらに多くの建物が存在したことも予想される。また墓地は、屋敷地内にあったものか、やや時代が下るものなのかという点について検討を要するところである。

(註)

1. 中間市の三幸ヶ野遺跡において、縄文時代後期の竪穴住居跡50基弱を検出している。
2. 宮崎市教育委員会 1981 「浄土江遺跡」『宮崎市文化財調査報告書第6集』

上の原第2・第3遺跡

県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1995年3月

編集・発行 宮崎県教育委員会
印刷 (有)富士写真印刷